

## 幾何学 II 演習問題解答 No.6 2019年11月20日

**問題 24** (1) (No.4, 問題 19 の解答も参照のこと)  $P_1, P_2$  を中心とする半径 1 の開円板  $B_1, B_2$  をとる.  $\mathbb{R}^2 = M \cup (B_1 \cup B_2)$  である. また  $M \cap (B_1 \cup B_2) = B_1^\times \cup B_2^\times$ , ただし  $B_1^\times = B_1 \setminus \{P_1\}, B_2^\times = B_2 \setminus \{P_2\}$ .  $\mathbb{R}^2$  の開被覆  $\{M, B_1 \cup B_2\}$  に対して Mayer-Vietoris 完全列を適用すると

$$\begin{aligned} 0 &\longrightarrow H^0(\mathbb{R}^2) \longrightarrow H^0(M) \oplus H^0(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H^0(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow \\ &\longrightarrow H^1(\mathbb{R}^2) \longrightarrow H^1(M) \oplus H^1(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow \\ &\longrightarrow H^2(\mathbb{R}^2) \longrightarrow H^2(M) \oplus H^2(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H^2(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow 0 \end{aligned}$$

$M$  は連結なので  $H^0(M) \cong \mathbb{R}$ . また  $B_i^\times$  は  $S^1$  とホモトピー同値なので  $H^1(B_i^\times) \cong \mathbb{R}$ ,  $H^2(B_i^\times) \cong 0$ . Poincaré の補題から  $q = 1, 2$  に対し  $H^q(\mathbb{R}^2) \cong H^q(B_1 \cup B_2) \cong 0$ . 従って Mayer-Vietoris 完全列から  $H^1(M) \rightarrow H^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \cong \mathbb{R}^2$  は同型, また  $H^2(M) \cong 0$  である.

コンパクト台のコホモロジーについての Mayer-Vietoris 完全列は

$$\begin{aligned} 0 &\longrightarrow H_c^0(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^0(M) \oplus H_c^0(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H_c^0(\mathbb{R}^2) \longrightarrow \\ &\longrightarrow H_c^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^1(M) \oplus H_c^1(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H_c^1(\mathbb{R}^2) \longrightarrow \\ &\longrightarrow H_c^2(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^2(M) \oplus H_c^2(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H_c^2(\mathbb{R}^2) \longrightarrow 0 \end{aligned}$$

である.  $B_i^\times \cong S^1 \times \mathbb{R}$  ゆえ Poincaré の補題より  $H_c^1(B_i^\times) \cong H_c^1(B_i) \cong \mathbb{R}$ ,  $H_c^0(B_i^\times) = 0$ . また同様に  $H_c^2(\mathbb{R}^2) \cong H_c^2(B_i) \cong \mathbb{R}$ ,  $q \neq 2$  に対して  $H_c^q(\mathbb{R}^2) \cong H_c^q(B_i) \cong 0$ . 従ってこの完全列は

$$\begin{aligned} 0 &\longrightarrow 0 \longrightarrow H_c^0(M) \oplus 0 \longrightarrow 0 \longrightarrow \\ &\longrightarrow H_c^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^1(M) \oplus 0 \longrightarrow 0 \longrightarrow \\ &\longrightarrow H_c^2(B_1^\times \cup B_2^\times) \longrightarrow H_c^2(M) \oplus H_c^2(B_1 \cup B_2) \longrightarrow H_c^2(\mathbb{R}^2) \longrightarrow 0 \end{aligned}$$

このことから  $H_c^0(M) \cong 0$ ,  $\mathbb{R}^2 \cong H_c^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \rightarrow H_c^1(M)$  は同型,  $H_c^2(M) \cong \mathbb{R}$  が分かる. ( $H_c^2(M)$  については最後の行の写像を詳しく見てもいいし, また短完全列  $0 \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow 0$  において  $\dim B = \dim A + \dim C$  であることを用いてもよい.)

(2) (1) での計算より  $H_c^1(B_1^\times \cup B_2^\times) \rightarrow H_c^1(M)$  は同型. 従って  $H_c^1(M)$  の基底は  $H_c^1(B_i^\times) \cong \mathbb{R}$  の基底の (包含写像  $B_i^\times \rightarrow M$  に関する) 押し出しとして得られる. Poincaré の補題での同型写像  $H^0(S^1) \xrightarrow{e_*} H_c^1(S^1 \times \mathbb{R}) \cong H_c^1(B_i^\times)$  の作り方から,  $H_c^1(B_i^\times)$  の生成元として  $\omega_i = e(r_i)dr_i$  の形のものが取れる. ただし  $r_i$  は  $P_i$  からの距離を与える関数で,  $e(r)$  は  $(0, 1)$  上のコンパクト台の  $C^\infty$  関数であって  $\int_0^1 e(r)dr = 1$  を満たすもの.

一方  $H^1(M) \rightarrow H^1(B_1^\times \cup B_2^\times)$  も同型であることから,  $\tau_i = d\theta_i$  が  $H^1(M)$  の基底をなすことが分かる. ただし  $(r_i, \theta_i)$  は  $P_i$  を中心とする極座標を表す. ( $\theta_i$  は 1 価な

座標ではないが,  $d\theta_i$  は  $P_i$  以外の点で well-defined であり,  $H^1(B_i^\times)$  の生成元となる. 具体的には  $d\theta_1 = \frac{xdy-ydx}{x^2+y^2}$ ,  $d\theta_2 = \frac{(x-3)dy-ydx}{(x-3)^2+y^2}$ . )

ここで  $i \neq j$  ならば  $\theta_i$  は  $\omega_j$  の台の上で 1 価関数にとることができるので, Stokes の定理により

$$\int_M \tau_i \wedge \omega_j = \int_M d(\theta_i \wedge \omega_j) = 0.$$

ここで  $\theta_i \wedge \omega_j$  がコンパクト台の 1-form であることを使った. 一方,  $i = j$  ならば  $B_i$  の極座標で計算して

$$\int_M \tau_i \wedge \omega_i = \int_{(r_i, \theta_i) \in (0,1) \times [0,2\pi]} d\theta_i \wedge e(r_i) dr_i = -2\pi$$

ただし  $M$  には標準的な向きを入れている.

別解: より一般に  $\rho(\theta)$  を周期  $2\pi$  のなめらかな周期関数で  $\int_0^{2\pi} \rho(\theta) d\theta = 1$  を満たすものとして  $\tau_i = \rho(\theta_i) d\theta_i$  と取ってもよい. このときは  $\rho$  の台をうまくとると  $i \neq j$  のとき  $\text{Supp } \tau_i \cap \text{Supp } \omega_j = \emptyset$  ゆえ  $\tau_i \wedge \omega_j = 0$  となって明らかに積分はゼロ.

(3)  $S_i$  を  $P_i$  を中心とする半径  $1/2$  の円,  $R_i = P_i + \mathbb{R}_{>0}(0,1)$  ( $P_i$  から  $y$  軸の正の向きに向かう半直線) とする.  $\omega_i = e(r_i) dr_i$  は上と同じものとし,  $\tau_i = -\frac{1}{2\pi} d\theta_i$  と定義しなおすことにする. このとき (2) の計算から

$$\int_M \tau_i \wedge \omega_j = \delta_{i,j}.$$

次が成り立つことを証明したい.

$$\begin{aligned} \int_{S_i} \tau &= \int_M \tau \wedge \omega_i & \forall \tau \in H^1(M) \\ \int_{R_i} \omega &= \int_M \tau_i \wedge \omega & \forall \omega \in H_c^1(M) \end{aligned}$$

これは  $\tau$  または  $\omega$  が基底のときにチェックすればよく,

$$\int_{S_i} \tau_j = \delta_{i,j} \quad \int_{R_i} \omega_j = \delta_{i,j}$$

であることから従う. ( $S_i$  には左回りの向き,  $R_i$  には上向きの向きをいれておく. また  $i \neq j$  のとき  $\int_{S_i} \tau_j = 0$  となることの証明には  $\theta_j$  が  $S_i$  上で一価であることに注意して Stokes の定理を使うとよい. )

注意:  $\tau_i$  の代表元として, 上記別解にある通り  $-\rho(\theta_i) d\theta_i$  の形のものをとると,  $R_i$  の十分小さい近傍に台を持つものが作れる. また  $\omega_i = e(r_i) dr_i$  の代表元として  $S_i$  の十分小さい近傍に台を持つものがとれる. つまり  $\tau_i, \omega_i$  の台は各々  $R_i, S_i$  を「近似」することができる.

(4)  $\tau = \tau_1 - \tau_2 = \frac{1}{2\pi}(d\theta_2 - d\theta_1)$  が題意を満たすことを示そう. 境界付き多様体  $N \subset M$  を

$$N = \{(x, y) \in M : y \geq 0, 0 \leq x \leq 3\}$$

とおく.  $\partial N = R_2 \cup R_1 \cup P_1 P_2$  である. Stokes の定理から任意の  $M$  上のコンパクト台 closed 1-form  $\omega$  に対して

$$\int_{\partial N} \omega = \int_N d\omega = 0$$

であるが, 左辺は

$$\int_{R_2} \omega - \int_{R_1} \omega + \int_{P_1 P_2} \omega = \int_M \tau_2 \wedge \omega - \int_M \tau_1 \wedge \omega + \int_{P_1 P_2} \omega$$

に等しい. 従って

$$\int_{P_1 P_2} \omega = \int_M (\tau_1 - \tau_2) \wedge \omega = \int_M \tau \wedge \omega.$$

別解: 基底に対する値  $\int_{P_1 P_2} \omega_i$  を計算して  $\tau$  を求めてもよい. つまり

$$\int_{P_1 P_2} \omega_1 = 1, \quad \int_{P_1 P_2} \omega_2 = -1$$

なので  $\tau = \tau_1 - \tau_2$  ととればよいことが分かる.

**問題 25** 略. 例えば, 河田敬義「ホモロジー代数」p.16 を参照せよ.

**問題 26** 次を示せばよい.  $\omega \in \Omega^{n-k}(M), \sigma \in \Omega_c^{k+1}(M \times \mathbb{R})$  に対して,

$$\int_{M \times \mathbb{R}} \sigma \wedge \pi^* \omega = \int_M \pi_* \sigma \wedge \omega$$

これは  $M$  の局所座標  $\{x_i\}$  をとって確かめられる. 実際,  $M$  の座標近傍  $(U, \{x_1, \dots, x_n\})$  において

$$\begin{aligned} \sigma &= \sum_I f_I(x, t) dx_I + \sum_J g_J(x, t) dt \wedge dx_J \\ \omega &= \sum_I h_I(x) dx_I \end{aligned}$$

とかくとき

$$\pi_* \sigma = \sum_I \left( \int_{-\infty}^{\infty} g_I(x, t) dt \right) dx_I$$

であるから,

$$\begin{aligned} \int_{U \times \mathbb{R}} \sigma \wedge \pi^* \omega &= \sum_{I, J} \int_{U \times \mathbb{R}} g_I(x, t) h_J(x) dt \wedge dx_I \wedge dx_J \\ \int_U \pi_* \sigma \wedge \omega &= \sum_{I, J} \int_U \left( \int_{-\infty}^{\infty} g_I(x, t) dt \right) h_J(x) dx_I \wedge dx_J \end{aligned}$$

Fubini の定理よりこれらは等しい. (ここでは  $T_{(x,t)}(M \times \mathbb{R})$  の向きを  $T_x M$  の oriented basis  $\{v_1, \dots, v_n\}$  を用いて,  $\{\frac{\partial}{\partial t}, v_1, \dots, v_n\}$  で入れている. 向きの入れ方によっては符号だけずれる.)

一般の場合は座標近傍で  $M$  を覆い, 付随する 1 の分割を使って, 座標近傍上の積分に帰着する.

**問題 22** 解答 No.5 を参照せよ.